

# 絆

## KIZUNA

### 故 井上達雄先生追悼特集号

中央大学公認会計士会会報 NO. 3

## 弔 辞

本日、ここに、故井上達雄先生のご葬儀が執り行われるにあたり、日本公認会計士協会の会員一同を代表しまして、先生のご霊前に心から哀悼の意を捧げます。

生者必滅の慣とは申しながら、先生には、去る4月24日、ご家族の手厚いご看護の甲斐もなく、87歳を一期として永遠の旅立ちをなさいました。

在りし日の先生の面影を忍び、ご遺族・ご親族の皆様の高い悲しみを思うとき、万感胸に迫り、誠に痛恨の極みであります。

顧みすれば、先生は、明治42年11月22日に生を享けられ、昭和7年3月、中央大学商学部をご卒業後、大学院に進まれ、会計学を専攻されました。昭和9年3月に大学院をご卒業後は先生の学究の情熱から大学に残られ、後進の教育に新たな情熱を注がれました。

先生のご功績は、昭和54年に教育功労として勲二等瑞宝章受賞に表れておりますが、また職業会計人としてもその功績は多大なものがございます。

先生は、大学院在学中の昭和8年2月に計理士の登録をされ、以来その業務に従事されてこられました。

戦後、公認会計士制度が創設されるにおよび、昭和24年の第1回公認会計士特別試験に合格され、我が協会の前身である公認会計士会設立準備運動に着手され、今日の協会の基礎確立に獅子奮迅のご活躍であったと今も語り伝えられております。

昭和24年、公認会計士会創設直後の搖籃の期に



理事、常務理事、監事と要職を歴任され、公認会計士制度の確立と日本公認会計士協会の発展に尽力され、更に指導公認会計士としても後進の指導に努められました。

また、大蔵大臣から公認会計士試験第二次試験委員に任命され、昭和26年から昭和34年までの間に会計学の基本である簿記の試験委員に5年、監査論の試験委員に4年、合計9年の長きにわたりその重責を果たされました。

更に、昭和53年には、大蔵大臣の認可を得て監査法人井上達雄事務所を設立し、証券取引法に基づく監査を中心に組織的監査を推進し、我が国経済の発展に寄与されました。

今、こうしてご霊前にたち、あらためて先生の

生前のご業績や、お人柄に思いを巡らす時、天寿をまっとうされたとは言え、哀惜の念断ちがたく、いまさらながら永遠の別れとなることのつらさがこみ上げて参ります。

これからは、在天の先生と幽明境を異にすることとなり、先生の恩顧を拝しご高導を受けることはかありませんが、私どもは先生のご遺志を体し、なお一層公認会計士制度ならびに日本公認会計士

協会の発展に努力することをお誓い申し上げお別れのことばといたします。

井上達雄先生、どうか安らかにお眠りください。  
合掌

平成7年4月27日

日本公認会計士協会

会長 山本秀夫

## 井上達雄先生を偲ぶ

中央大学公認会計士会 前会長

川北 博



忘れもせぬ95年4月24日早朝、入院先の聖路加国際病院で忽焉として井上達雄先生が逝去されたから、はや半歳を数える。

有縁の者の多くが集まった中野区宝仙寺の通夜と翌27日の葬儀・告別式も終わり、6月10日には親族と教え子により、小平霊園において49日の法要を行い、同霊園の井上家の墓所に納骨を済ませた。

いくつかの雑誌等から追悼記の投稿を依頼され、先生のご存命中の偉業等については既に多くを述べたから、ここでは中央大学公認会計士会との関わりを中心にいくつかの思い出を語らせていただくことにする。

さて、先生のご逝去の直前4月13日には、中央大学駿河台記念館で、中央大学学会の正副会長会等があり、次いで中央大学公認会計士会の総会があった。それ以前、先生には、風邪をひかれた後、なかなか癒らず、暫く聖路加病院に入院しておられ、退院されて間もなかったので、私たちは先生は未だご静養中と思っていた。そして、下馬評によると、中央大学学会の副会長を先生は長く務められたから、堂野会長ご退任後は、先生が次期会長の有力候補であるという話も聞こえていたこともあり、私たちは、老いてなお盛んな先生の一層のご活躍をお祈りするとともに、一日も早

いご快癒をお祈りしていた。

ところで、当日の中央大学公認会計士会の総会には、少しばかりの難題があった。それは、「今が発足してからそれ程の年月が経過していないのに会長以下の改選は早急すぎる」という先生の強いご意見があったからである。しかし、一方で私は、中央大学公認会計士会創立当初の初代会長として、皆さんのご推挙を受けたとき、他の大学の事例をも参照し、かつ過去の反省をも含めて、会長1期交替、全員参加型の会の運営を提唱し公約したことから、先生のご意見に逆らうことになり、すっかり困ってしまった。だが、この点については、幹事長の増田さんたちが聖路加病院の先生のお見舞いに参上し、さりげなく先生のご同意をとりつけ、一応の解決をみていた。

その4月13日に、なんと先生は学会の会合に出席され、そののち、公認会計士会の総会にも顔を見せられたのである。

驚いて、「先生、お身体は大丈夫ですか？」と気づかう私たちに、「なあに、まだまだ元気だよ。」と幾分やつれてはおられたが、はっきりしたお声でみんなに声をかけられた。その私の横に坐られて、またまたお叱りを受けるかなと思っている私に「(会長を退任するのが)早すぎるよ」と一言だ

け言われて笑っておられた。私に対しては、珍しく温かな先生であった。そのスピーチもユーモアを交え、二次合格者の減少を憂え、全員に感銘を与えた。

それから10日も経たぬ22日の土曜日に、先生は再び不調を訴えられて入院されたが、日曜日には元気に回復され、遠くロンドンの夫君の任地から帰国された末娘の陽子さんとも歓談され、奥様に帰宅してみんなゆっくり休むようにといわれたという。そして、翌24日早朝、病状急変して急ぎ集まったご家族の看まもる中で息を引き取られた。

青年時代に結核を患われたというが、私どもの学生時代からは頑健そのものに見えた先生であった。そして、私どもの見るかぎり強運な先生であ

り、自らモットーとされた「熱と誠」を人々に印象づけられた一生であった。

先生は、中央大学教授として、また学長や総長代理、あるいは学員会副会長等として中央大学とともに生きられたが、一方、公認会計士としても初期からその業績を築かれた。そして、中央大学会計人会や中央大学公認会計士会等の学員の団結の中心でもあり、それらの歴史そのものでもあった。

今、偉大な先生を失った私たちは、茫然たるものがあるが、同時に大きな時代の転換を感じつつある。創立なお日の浅い中央大学公認会計士会ではあるが、母校との縁を大切にしてお互いに切磋琢磨し、手をとりあって輝かしい前途を切り拓いていきたいものである。

## 井上先生のこと

中央大学公認会計士会 会長  
山本秀夫



平成7年4月13日、中央大学公認会計士会総会の後の懇親会のときでした。入院されたと聞いていました井上先生が来られ挨拶もされましたので、良くなられてよかったなあと思っていましたところ、どうもいつものような張りのあるお元気なご様子がなく、力のない感じでした。しかし、ビールを飲まれお酒を頂いておられたので、ほっとしておりましたが、どうも変な感じがいたしました。ちょうど私は車でできていたので、みなさんと相談し、先生は気が進まないようでしたが、早めに車でお送りすることにいたしました。途中ゆっくりされたと思いますが、お元気でした。

ところが、4月24日、協会で役員会をしていたところ、7時23分、先生が肺出血で亡くなられたとの報に接し、驚いた次第です。まさかと思いましたが、事実でした。

思い出しますと、先生に初めてお会いしたのは、昭和17年頃中央大学経済学部にて在学中の頃

です。甲府商業出身の私は、簿記・会計には慣れていましたので、先生と太田先生の講義にはよく出たつもりでしたが、何せ戦時中のことでしたので、大学に行くのが精一杯でした。昭和18年、学徒出陣で学友の大部分が入隊してしまいましたので、翌年回して残った私どもだけで昭和19年9月卒業式が行われました。そんな関係で本年10月22日に同年度の卒業式を再度行うことになったのです。

終戦後、時々先生のお宅にはお伺いしましたが、今、印象に残っているのは、何といても中央大学経理研究所における先生の講義です。会社に勤めていた私が、公認会計士試験を知ったのは昭和28、9年頃で、勉強のため経理研究所に通いました。その時、先生が簿記の講義を担当され、黒板に向かって教科書も持たずに仕訳をし計算をし、それを私たちはノートしました。その潑刺とした先生のお姿が、今でも脳裡に強く焼きついていま

す。その時の講義内容が、名著「例解会計簿記精義」であったのではないのでしょうか。

その後、商学部長、経理研究所長とにいられたのですが、当時、公認会計士になるには中央大学商学部に入れ、といわれていた程で、それは先生がおられたからです。

そして、学長になりました。時々、学長室にお伺いしましたが、大きなお部屋で入口に美しい女性の秘書がおられたのを憶えております。

また、昭和54年の勲二等瑞宝章受賞祝賀会のことか思い出されます。飾ってある勲章を交代で番をすることになっていたのですが、興奮のあまり途中から番をする人がいなくなっていました。それほどに賑わったのです。

井上ゴルフ会も懐かしい思い出です。先生が西荻窪で私が荻窪です。川島さんが私のところまで来られ、その足で先生をお迎えに行き、車に先生をお乗せしてゴルフ場へ、とのコースが多かったと思います。東松山を300万円で購入したが下がってしまったとか、余り高くないゴルフ場を数カ所購入しておいて、定年退職し所得が減ってから

少しずつ売れば良いなどと教えてくれました。また、私はゴルフが下手なものですから、もう少し練習をなさいとよく注意されました。しかし、お酒の方は私もいける口でしたので、ゴルフの帰りに先生のお宅でまた飲んだこともありました。先生はお元気で、晩年までよくゴルフをされ、お酒を嗜まれておりました。それでも最近、気を付けられておられたのでしょうか、ビールなどと仰せられましたが、結局お酒を飲まれておられました。

平成5年10月、図らずも井上齊藤英和監査法人と朝日新和会計社が合併となったので、先生と同じ法人となり、先生は最高顧問、私は相談役で法人での会合でも一緒にする機会が多くなりました。その矢先のことです。残念でなりません。

大学における教育ばかりでなく、日本商工会議所簿記実務検定試験委員、公認会計士二次試験委員、日本公認会計士協会・日本会計研究学会の常務理事、理事、監事等を歴任され、学会、業界にも多大の貢献をされ、私ども後輩の柱とも言うべき先生を失って戸惑っています。しかし、私ども一致協力して先生の偉業を継がなければなりません。

## 井上達雄先生を偲んで

中央大学経理研究所 所長  
渡部 裕 亘



井上達雄先生が急逝されてから、はや半年が経とうとしている。ご葬儀の日は初夏の日差しで汗ばむほどの暖かさであったが、今は残暑が厳しいとはいえ、秋の気配が身に染む頃となっている。この間、先生がご存命ならばさぞかし、と思わざるを得ないことが多い。いまさらながら、先生の存在の偉大さが偲ばれ、追慕の念が深い。

顧みれば、昭和33年に増田、籀本、川島などの諸君と共にゼミに入れていただいて以来、ほぼ37年にわたって、公私ともにお世話になった。学生時代には、会計学を通して学問の本質、研究の方

法、研究者の在り方などについて徹底的にご指導を受けた。先生は、会計学の実践科学としての有用性を強調され、空理空論を排された。ゼミでの議論などでも、展開された理論に関し、仕訳をすればどうなるかを絶えず問われ、理論と実践との有機的統合を重視された。この仕訳重視の思考に、井上会計学の神髄があったのではないかと思うのである。

ゼミの後には、新宿の「秋田」や「樽平」にお供をして、酒の飲み方や処世の術などの薫陶を受けた。わけても、何事にも情熱を持って取り組み、

ことを処するにあたっては誠実であらねばならないという先生の人生訓「熱と誠」には、教えられるところが多かった。この「熱と誠」という先生の座右の銘は、いまではゼミの出身者以外にも広く人々の知るところであり、先生の生涯をよく表現しているといえるのではないかと思う。

宴席での先生は、馳蕩として杯を傾け、大人の風格があり、「からかさ」、「青柳」、一息「串本節」などを口吟まれ、晩年までいかに酒を楽しむといった風情であった。いまもって、唄が耳に残るが、もうご一緒できないと思うと、誠に残念至極である。

先生が中央大学を定年でご退職になってからは、ほぼ月1回のペースで事務所をお訪ねして碁を打ってきた。もう15、6年になる。棋力はほぼ互角で、時には二子になることもあったが、たいていは互先で打ち、戦績も一勝一敗の打分けであった。先生の碁は、いわゆる本格派で、石がおどらずしっかりしていた。奇手や品のない手は好まれず、切ったはったの喧嘩碁よりは布石から寄せに至るまで地を重視するどちらかといえば地味な碁風であった。碁は人を表すというが、まさに先生のお人柄がよく反映していた。先生の負けず嫌いは徹底しており、亡くなられるまでテレビや本で勉強を続けられ、次に備えておられた。この点、怠惰な我が身に引き比べ、頭の下がる思いであった。碁の後は、菅原さん（元経理研究所室長）や木下さんなどと一杯やるのが常であったが、これもおしまいとなり、寂しい限りである。

先生は、中央大学経理研究所の生みの親でもあ



93.1.27. 中央大学公認会計士会総会にて

り、また長年所長としてその発展にご尽力されたこともあり、経理研究所には格別の愛着をお持ちになっていた。そのような関係で、名誉所長でもあられた先生には、折りに触れて業務報告を申し上げると同時に貴重なご助言をちょうだいしてきた。その中で、先生が特に関心を抱いておられたのは、公認会計士第二次試験の合格者についてであった。周知のごとく、中央大学の合格者は、このところ低迷を続けて、昨年にはいたっては大学順位で7位に転落するという不甲斐なさであった。先生は、これを深く憂慮され、頹勢を挽回するための方策について貴重なご助言を寄せられるとともに、私どもスタッフ一同に努力を傾注するよう叱咤激励されてきた。その成果が出る前に、先生が逝かれたことは返す返すも残念でならない。一日も早く、先生の墓前に吉報をご報告したいと念じて止まない。

先生からお受けした数々のご恩に感謝しつつ、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## 熱と誠

### 中央大学 教授 白鳥 栄 一



先生がお亡くなりになったとの悲報を耳にした時、一瞬茫然としてしまった。10日程前に催され

た、中央大学公認会計士会で先生にお目にかかったばかりだったからなおさらである。今年に入っ



て原因はよくわからないが、体調が余りよくなく、入院もしていたと、先生からその時初めて教えていただいたが、その席でみんなに「この公認会計士会が単に形だけのものではなく、若い人達が喜んで大勢参加するような実のある団体になってほしい。後輩を刺激し、毎年新しい会員がどんどん増えるような活動を前向きにやってほしい。」など熱っぽく語っていた様子を見てみると、先生が病身であるとは私には到底思えなかった。その時は、周りの人達が気をつけて先生は早々に引き上げられたが、10日後に訃報に接するとはとても想像できなかった。

思い起こしてみると、先生と個人的に接するようになったのは、大学卒業後しばらくしてからであった。先生の海外留学と私の3年次が重なってしまい、井上ゼミ員にならなかったためである。もちろん、先生の授業には何回か出席した。何を具体的に教えていただいたか記憶にないが、理路整然とした講義ふりと、時折、黒板に何かを書かれていた姿だけは今でも鮮明に憶えている。私は、大学の授業にはほとんど出席しなかった。たまたま、先生の授業を聞く時は偉い著名な先生の講義だから、一生懸命聞こうと頑張っていたことだけは事実である。

卒業後、商学会の委員長であったこと、また、卒業後も後輩を指導していた関係から先生と直接お話できる機会が持てるようになった。でも、先生との親密度を増やさせてくれたのは、私のアサーアンダーセン入社であろう。卒業2年半後のことであったが、入社に際しては先生に推薦状を書いてもらったし、それから2年半後の私の結婚に際しては、先生ご夫妻に媒酌人になることを喜んで引き受けていただいた。それからは、先生と接触する機会は徐々に増えてきた。

先生の教え子達によると、先生は相当厳しい方と聞き及ぶこともあったが、私にはそのような実感はない。先生と一緒にいると話題が豊富な上、偉そうな格好をせず、対等にいつも明るい前向きな姿勢を示されていたためか、先生とお話する機会があるといつも私は、その時も後になっても自

分の心が自然と和むのがはっきりとわかった。

縁があって数年前には、先生と仕事をご一緒するという名誉を得た。オフィスも隣同士であった。しかし、私が法人退職後であったのと国際会計基準委員会の関係で海外出張が多かったこともあって、二人親しく話し合う機会が思ったより少なかった。残念至極なことである。

それでも先生からはいろいろなことを盗みとることができた。私が母校で教鞭をとるようになった時は、先生は本当に喜んでくださった。その後、大学のことをいろいろ教えてくれたし、授業などのことについて、私の相談にもものってくれた。先生の大学（中央）に対する強い情熱はいつも言葉の端々からにじみでていた。先生の座右の銘「熱と誠」の熱をそのまま先生自らが実践している感じであった。

今までたくさんの方の座右の銘に出会ってきたが、「熱と誠」は私が一番好む語句である。アンダーセン、イオナ時代の後輩や大学での教え子に自分の生き方を簡素で含蓄のある言葉を贈らなければならない機会が数えられないくらいある。先生の座右の銘が一番好きでありながら、そのままコピーして他人に売るのに少し抵抗感があった。そのため、今まで何十年も私の座右の銘として適当な言葉をずっと模索するはめになってしまった。今でもこれという語句は決まっていなかったのである。どれも先生の「熱と誠」に劣っていると思えるからである。

「熱と誠」は人生でどうしてもつきあわなくてはならない仕事と人間の両要素について、それぞれの一番大切なところをひとことで表現してしまっているから、これに優る言葉はそう簡単には見つけられない。私の言葉探しもそろそろギブアップする時期になったかもしれない。先生のお許しがいただければ（先生の生前に許可をもらうべきであったが）、これからは先生の「熱と誠」を私のモットーとして後輩に贈っていきたいと思うようになった。先生、いかがでしょうか。

先生のオフィスには、「青春の詩」と彫られた青緑色の大理石が置かれてあった。いつまでも若く

ありたい、若者のようにいつも夢を持ちたい、という思いからだっただろう。私も同じ思いを持っている。私がよく使う言葉のひとつに“Waste and Want”という語句がある。ガラクタ(古い物)は捨て新しい物をいつも求めよ、という意味だがいろいろと拡大解釈もされる。これが「青春の詩」に相通じるものがあると私は思っている。そこで、「熱と誠」と“Waste and Want”の2つを私の座右の銘にするのはいかがなものか。欲張りすぎであろうか。できるなら先生のご意見を伺いたいところだが、遅きに失してしまった。

先生のお陰で、我が母校から数多くの会計人が輩出した。中には、先生から直接指導を受けた者もいるし、直接指導は受けなかったが先生の存在だけで鼓舞された会計人も相当な数にのぼる。これらの会計人が職業会計人としてのみならず、社会の多方面で活躍している。

井上先生、先生がやってこられたことに私たちは誇りを持っています。また、感謝の気持ちでいっぱいです。先生、どうぞ安らかにお眠りください。  
合掌

## 激変する監査業界を井上先生とともに

公認会計士  
齋藤力夫



4月13日、学会会・公認会計士会総会の席上、井上先生と親しく益を酌み交わし、ご病気が快癒されたお姿に接したのが最後であった。それからわずか10日過ぎの4月24日の訃報、あまりにも突然のことで茫然自失した。先生とは、昭和62年の合併前後以来、8年間、監査業務をともにし、月に1回程度、酒席で楽しく歓談したことが今から思えば懐かしく、また、もっと孝を尽くすべきだったと後悔も残る。中央大学、会計士業界、監査業界での足跡から種にみる偉大な先生を失ったことはきわめて残念に耐えない。

私は、大学で井上先生の講義は受けていない。在学中から中央大学経理研究所に通い、税理士受験コース、公認会計士受験コースで、井上先生の明快、かつ迫力ある簿記論の講義に接し、感動したのが初めてである。その後、税理士試験を突破、引続き会計士試験をクリアできたのも、先生のお陰と感謝している。特に、「例解会計簿記精義」は、毎日の座右の銘とし、ボロボロとなるまで使い古した。生涯忘れられない名著である。

先生とは、個人的にお逢いし私の名前を知って

戴いたのは、昭和55年頃と記憶している。当時、私は齋藤事務所を中央共同監査法人(昭和49年設立)とし、日本橋茅場町に事務所を構えていた頃、種々の会合で先生とお逢いし、2次会等で雑談していたが、深刻な会計士不足の解決と、営業力の強化の面で意見の一致を得、合併の方向で話し合いが行われ、昭和62年10月に井上齋藤監査法人としてスタートしたのが奇縁となった。このことで、2~3年間人材を確保することができたので、私はもっぱら業務開拓に専念できた。当時、証券業界はご承知のとおり大変な活況を呈しており、株式公開ブームとなり、合併後、各証券会社企業部、公開引受部、ベンチャーキャピタル、銀行等と共同し、ベンチャービジネスを順調に獲得、以後、毎年1~2社の公開実績を果たすことができた。また、学校法人監査も、沖縄から東北まで進出、福岡、大阪に事務所を設けることができた。

業務開拓とその成果を先生にその都度報告すると、先生は大いに喜び、積極的にご支援くださった。先生は、学者であるとともに営業センスもあり、監査法人の会議で常に業務展開の重要性を強

調された。株式公開達成したときは、その報告を兼ねて先生と祝杯し、相好を崩して喜んでおられたお姿は今でも鮮烈に脳裡に残っている。

先生は、楽しいひとときを過ごすお酒が大好きで、高級な料亭であろうと居酒屋でも場所は問わない。ただ、酒量の度が過ぎると番茶や煎茶を必ず用意させ交互に飲むようにして健康に留意されていた。私が感心したことは、飲むにしたがって記憶が次第に蘇ってきて、経済界・業界のできごとや人名が次々と会話にでてくることである。あまりにもお元気なので、「先生、私の方が先にくたびれそうです。」という、「何をいうか。俺は100歳まで元気で過ごすぞ。お前も頑張れ。」と励ましかどうか大きな声で叱咤されたことを昨日のように思い出す。

合併した後、昭和64年、以前に設立した福岡事務所に、先生ご夫妻にきていただき、私が当初開拓した福岡県、熊本県、大分県のクライアントを訪問したことは、懐かしい思い出になった。福岡事務所の会計士の案内で、各クライアントを訪問し、夜は各地で井上先生歓迎の宴が催され、先生

ご夫妻に大変喜んでいただいた。大分市に入り、まず、先生と平松県知事を訪問したが、平松知事が直接出迎えられ、その際、昭和天皇のご病氣快癒祈願の記帳をした。先生は、私の向かって「お前は江戸っ子なのになんで俺の故郷まで進出したのか」といって深く関心されたことを恐縮している。大分では、井上ゼミの教え子たる秦野晃郎氏がホテルまで迎えて歓待して下さったことを感謝している。

当時は、40~50人の中堅監査法人で、意志伝達も早く、理想的な事務所であったが、国際化の急速な進展に伴い、クライアントからの強い要望に抗せず、種々協議の上、アーサーアンダーセングループの英和監査法人と平成3年9月に合併、先生は会長に就任された。その後、急速な監査業界の再編成の波が押し寄せ、平成5年10月、現在の朝日監査法人と合併し、先生は法人の最高顧問となられた。

以上、雑駁ながら、監査事務所の変遷と、先生とのお付き合いの思い出を偲んだ次第である。

謹んで、先生のご冥福をお祈りいたします。

## 井上先生の思い出

公認会計士  
川島 正 夫



井上達雄先生に最初にお目にかかったのは、小生が大学2年に進学して会計学研究会に入会した新入会員歓迎会の席でのことでした。当時の先生は、我々新入会員にとっては近寄りがたい雲の上の存在でしたので、どのような会話があったかまったく記憶がありません。

小生は、公認会計士の受験を目指していましたので、中央大学経理研究所で先生の簿記論及び会計学の講義に接する機会を得ました。その後、4年に進級した時、同級生の浅野修一さんの推薦で井上ゼミに受験する機会を得ました。当時井上ゼミ

に入るのは、難関中の難関でした。しかも、3年進級時に受験するのが一般的でしたし、その上小生は法学部法律学科に在籍していましたので、まったく異例の受験とあいなりました。法学部で井上ゼミに入ったのは、「古今お前一人だ」と先生がよくおっしゃいました。

先生との出会いで小生の人生が大きく変わった事柄についてふれてみたいと、思います。4年在学中に公認会計士第二次試験を受験しましたが、見事失敗しました。当然就職問題につきあたり、父が東京都交通局にいましたので、父の推薦で交通



局に入社する手筈になり、井上先生の推薦状をお願いにあがりました。その時期先生は公認会計士第二次試験の試験委員をされていたので、小生の点数を知っておられ、「お前はあと7点で合格するところだった」とおっしゃられ、就職もいいがもう一度受験してみたらといわれました。父と相談し、受験にふみきり4ヶ月浪人し、9月に公認会計士第二次試験に合格し、職業会計人の道に入りました。もし先生のお言葉がなかったら、現在の小生はなかったと、深く感謝しております。また、小生が昭和42年にコンピュータの会社を設立するにあたって、先生に相談申し上げたところ、「公認会計士業界以外の仕事をされるのもいいんじゃないの、特にコンピュータ関係は将来性があ

っていいのでは」と先見性のあるお言葉を頂戴し、ふみきました。

おかげさまで、平成6年3月1日にパソコンによる財務会計のパッケージソフトを販売する会社「ピーシーエー株式会社」が店頭公開いたしました。もちろん監査は井上先生にお願いし、監査証明をいただきました。

このように、井上先生には長期間公私にわたりお世話になりましたが、まだまだこれからもご指導を賜りたいと思っていた矢先に誠に残念でなりません。

井上先生のご冥福を心より祈念して筆をおかせていただきます。

## 思い出すまに

### 公認会計士 旗 本 道 男



#### 昭和32年秋

井上先生の帰朝講演会が大学の比較的大きい教室で開催されました。アメリカ留学のご体験をたくさんの方のスライドを使っての講演会で、私は一番前の席で先生のご尊顔を拝し、たいへんに感激しておりました。

#### 昭和33年春

憧れの井上ゼミへの参加が許されました。すばらしい仲間との出会いでもありました。最初のゼミで、4年生に論戦を挑んだ渡部裕亘氏(中大教授)、公認会計士になった増田浩二氏、川島正夫氏、浅野修一氏ら、誠に多士済々の15名の仲間達でした。

#### 昭和33年秋

私は、幸いにも、この年の公認会計士第二次試験に合格することができましたので、経理研究所所長室に先生をおたずねして合格の報告をしましたところ、「まだ若いね、第三次試験は35歳位でいいよ、40歳でもいいかな。」とのお言葉でした(そ

の意味が理解できたのは、37、8歳頃だったと思います)。

#### 昭和34年春

ゼミ委員の一人になり、コンパや旅行の幹事役。コンパでは、学生用は2級酒でも、先生の前には1級酒を最低5本用意しました。

コンパ終了後は、先生をご自宅にお送りすべくタクシーにお乗りいただくが、我々の仲間数人も同乗、西荻窪のはるか手前の新宿で途中下車、「秋田」や「樽平」で樽酒の味を知ることができたのは、まさに役得でした。

#### 昭和35年秋

私は札幌の小さな事務所に就職。

#### 昭和40年代半ば

先生は学長、総長職務代行を終えられてからは毎年夏、監査や学員会の仕事で札幌へおいでいただけるようになりました。必ず1日は空けていただき、山田耕市氏(ゼミ仲間、札幌にて会社経営)

と私とがお酒の飲み方を教わり、翌日はゴルフでした。山田氏も私もゴルフはまだ始めておらず、お相手はもっぱら前夜のクラブの女性にお願いしていました。

#### 昭和51年から

山田氏と私がゴルフを開始。以後毎年我々二人がお嬢様へのチョコレート供給者でした（最初はコインや札で決済することを知らず、チョコレートを現物決済しました。）。二人とも各ホール1つのハンディの時代が何年も続きましたが、いつもいやな顔もせず、楽しそうに教えてくださいました。

だんだんと、札幌にもゼミ出身者や中大出身の学者や公認会計士が増え、毎年先生（時には奥様も）を囲んでの懇親会は10名以上の規模となり、夏の大きな行事になりました。

#### 平成6年6月12日

私の息子の結婚披露宴に先生ご夫妻にご出席いただき、身にあまりご祝辞をちょうだいすることができました。その時の8分30秒のビデオテープはわが家の家宝にしております。

## 郷里大分での井上先生

1ヶ月位前だったでしょうか、4月から地元の大分大学経済学部で「税務会計論」の講義を担当することになったので、まず先生へご報告をと思い、ご自宅へ電話しました。先生がお出になられ、「秦野君、良かったね。頑張りなさい。」いつもの恩情あふれるお声で喜んでいただいたばかりでしたので、「先生が今朝（平成7年4月25日、午前7時37分）お亡くなりになりました。との報に接した時には、本当に驚きました。

私は、昭和34年の春から、大学院修士課程卒業までの4年間、先生から薫陶を受けましたが、同郷の誼みからでしょうか、何かと気にとめていた

その前夜、井上先生ご夫妻、岡本清先生（一橋大学名誉教授）、松本正徳先生（中大商学部長）、藤永弘先生（札幌学院大商学部長）と私ども夫婦との会食は、まさに抱腹絶倒の3時間になりました。

#### 平成7年4月5日

増田浩二氏と私は聖路加国際病院にお見舞いに伺いますと、「今週退院するよ。」とおっしゃりながら、13日開催予定の中大公認会計士会や中大学員会のことをいろいろご心配され、早速電話機を取り上げられたのにはたいへん恐縮しました。しかし、誠に残念なことに、次に私が先生にお会いできましたのは、25日、すでに柩の中でした。

#### 平成7年8月10日

30数度の暑い日でした。小平霊園に眠れる先生の墓前に38年間のご恩に感謝申し上げ、楽しかった数々の思い出を語り、公認会計士第三次試験の試験委員になったことを報告いたしました。「何歳になっても、勉強を怠らないように」とのお声が聞こえてきたようでした。 合掌

### 公認会計士

### 秦野晃郎



だき、しばしば格別のご配慮をいただきました。私の父は、昭和5年中央大学卒業で、昭和24年に公認会計士となり、大学時代は同時期であった関係上、先生とは古くからの友人でした。そんな関係から、先生が学界にデビューした出世作「例解会計簿記精義」（森山書店、昭和9年9月刊）が父の書棚にありましたが、先生が私の事務所にお見舞いの節、お見せしたら、両手で広げながら、「なつかしいね。良く保存してありますね。」と心から満足そうなお様子でした。子供の頃から、中央大学に入学して、井上先生の指導を受けるようにいわれていましたので、ゼミに入ることを許された時

は、本当にうれしく、興奮したことを思い出します。幸い、先生のご指導により二次試験には在学中に合格することができ、先生から「君の親父さんへの責任は果たしたよ。」といわれ、引続き、大学院で勉強しないかと勧められました。先生の会計学における業績等につきましては、渡部教授や公認会計士の木下先生がおられますので、私は先生の出身地大分での先生のご様子について思い出すまま書いてみました。

8月初旬になると、中央大学学会の大分県支部総会と母校教授による学術講演会が開催されるのが恒例行事となっていました。先生は学会副会長として、母校の近況報告をなさるため、毎年帰県されました。大分県支部では、先生を名誉会員に推戴し、年1回ではありましたが、同窓生は先生とお会いできることを楽しみにしていました。

先生は帰県されると、支部総会出席のみならず、かつて在京大分県人会の会長をされていたこともあり、大分県庁知事室か、時には公舎にお連れして平松守彦知事を表敬訪問することも恒例となっていました。平松知事からは土産として大分県の一村一品の産物話合せをたくさんちょうだいし、大喜びのご様子でした。県庁からの帰りには、大分市長を訪問し、大歓迎を受けていました。

アルバム帳を捲ってみると、昭和50年代初めより、先生は支部総会出席のため帰られるようになりました。連絡を受けた私は、帰県に合わせてゴルフ場の予約をしたものです。第1回目は、中央大学に因んで、大分中央ゴルフクラブにおいて開きました。メンバーは後藤孔明大分県支部長（前大分県農政部長で、当時は大分市助役）と小林先輩（昭和35年卒井上ゼミ、当時は大和証券大分支部次長）と私がお供をしました。支部長も私もHDは18でしたが、先生のやわらかなスイングから飛び出すドライバーの飛距離は優に200ヤードを超え、私どもは数十ヤードいつもオーバーされ、先生のお元気ぶりには本当に驚きました。大分中央ゴルフ場の中央のマーク入りのゴルフ帽子をかぶり、「今日は中央一色だね。」とスコアの良さも手伝ってかご機嫌良く、一日を芝生の上で過ごされ



ました。昼食時には、在京大分県人会のゴルフ大会で優勝したこと等楽しそうに話され、お酒と健啖な先生の胃袋にも驚かされました。ゴルフ終了後、19番ホールへ向かう車の中で、「秦野君、ほくは90歳位まで元気でゴルフをやれると思う。今は、頭脳老化防止のため、パソコンをやっているよ。」とお元気そのものでした。夜の歓迎会は、中央大学OBの元小結豊国関の経営する「ちゃんこ豊国」で開きました。先生は、ちゃんこ料理がお口に合ったのか、「うまいね、郷里の酒はいいね。」と至極ご満悦の体でした。豊国さんをお願いして早く開店してもらって、始めた歓迎会はいつの間にか他のお客は帰り、井上先生と私どもだけになりました。「秦野君、あと2本だけで終わりにしよう。」といわれてから、お立ちになるまで燗瓶22本が並びました。翌年からは、大分県支部一の飲み手といわれる平岡先輩（昭和33年経営学部卒）を担ぎ出して先生の酒のお相手になってもらいました。

先生を偲べば思い出は尽きませんが、思えば、昨年奥様との帰県が最期となりました。ちょうど、大分県から村山総理が誕生したばかりの頃でした。

空港から大分市内へ向かう車の中で、「秦野君、村山総理の生家が質素なことでマスコミで有名になっているようだが、行ってくれないか。」といわれ、奥様とご一緒にお連れして、記念写真を撮りましたことも、今となっては懐かしい思い出となりま

した。

往古茫茫35年、先生への思慕は尽きませんが、私は「郷里大分での井上先生」について記して先生追悼の記といたします。

先生のご冥福をお祈りいたします。

## 決算報告

### 平成6年度収支計算書

(自平成6年4月1日 至平成7年3月31日)

I. 収入の部		(単位：円)
	決算額	
1. 会費収入	1,004,000	
2. 懇親会収入	231,000	
3. 同好会収入	92,000	
4. 受取利息	8,619	
5. 雑収入	50,000	
収入合計	<u>1,385,619</u>	

### II. 支出の部

1. 總會関係支出	710,000
2. 同好会関係支出	181,452
3. 会報関係支出	271,750
4. 学生奨学関係支出	244,164
5. 対外関係支出	30,000
6. 支払手数料	12,948
7. 雑支出	128,271
支出合計	<u>1,578,645</u>
当期収支差額	△193,026
前期繰越金	<u>1,578,467</u>
次期繰越金	<u>1,385,441</u>

### 貸借対照表

(平成7年3月31日)

I. 資産の部		
1. 現金	金	20,261
2. 郵便貯金		911,840
3. 郵便振替		453,340
		<u>1,385,441</u>

II. 負債の部		—
----------	--	---

### III. 収支差額の部

次期繰り越し収支差額	<u>1,385,441</u>
負債及び収支差額の部合計	<u>1,385,441</u>

### 財産目録

(平成7年3月31日)

I. 資産の部		
現金(手元現金)		20,261
郵便貯金(港芝浦郵便局)		911,840
郵便振替(港芝浦郵便局)		453,340
資産合計		<u>1,385,441</u>

## 平成7年公認会計士第二次試験 出身大学別合格者数

1位 (2)	早稲田大学	134名	6位 (9)	同志社大学	26名
2 (1)	慶応義塾大学	133	7 (8)	明治大学	22
3 (7)	中央大学	41	8 (-)	関西学院大学	21
4 (3)	東京大学	39	9 (5)	京都大学	19
5 (4)	一橋大学	27	10 (5)	神戸大学	17

( ) は前年順位

日本公認会計士協会調査による。

## 中央大学関係1995年(平成7年)公認会計士第二次試験合格者

経理研究所関係 (24名)

氏名	学部・学科	在・卒	ゼミ
赤澤 賢史	商・会計	94.3卒	木島ゼミ
芦川 弘	商・会計	94.3卒	渡部ゼミ
市川 功博	経・産経	4年在学	—
茨木 純一	経・国経	93.3卒	栗林ゼミ
岩崎 寛子	商・会計	93.3卒	川北ゼミ
内山 貴史	商・経営	95.3卒 (大学院在学)	北村ゼミ
大河原啓充	法・法律	4年在学	—
大竹 裕子	商・会計	4年在学	富塚ゼミ
太田 和佳	商・会計	95.3卒 (大学院在学)	中瀬 (御船)ゼミ
上出 亮	経・国経	4年在学	—
國方 明	経・経済	4年在学	栗林ゼミ
栗原 猛	法・法律	95.3卒	—
小泉 明大	商・商貿	4年在学	矢部ゼミ
佐藤 真史	商・会計	94.3卒	渡部ゼミ
佐野 裕美	商・会計	4年在学	川北ゼミ
杉浦 正博	商・会計	95.3卒 (大学院在学)	北村ゼミ
田中 俊郎	商・会計	91.3卒	北村ゼミ
徳永 剛	商・会計	94.3卒	渡部ゼミ
藤野 光子	商・会計	94.3卒	石川ゼミ
古庄 研二	法・法律	89.3卒	—
松本 大明	商・商貿	94.3卒 (大学院在学)	大津ゼミ
山野 照久	商・会計	93.3卒	川北ゼミ
山野 辺純一	商・会計	94.3卒	渡部ゼミ
渡邊 英滋	商・会計	4年在学	北村ゼミ

経理研究所以外 (17名)

氏名	学部・学科	在・卒	ゼミ
小國 義之	商・会計	92.3卒	川北ゼミ
片岡 誠	経・経済	91.3卒	—
金子 明弘	商・会計	91.3卒	石崎ゼミ
壽山 保	法・法律	88.3卒	長内ゼミ
鈴木 隆文	商・経営	92.3卒	北村ゼミ
鈴木 誠	商・経営	91.3卒	横倉ゼミ
鄭 浩哲	—	大学院在学	北村ゼミ
中田 幸康	経・産経	4年在学	吉村ゼミ
中村 肇	法・政治	91.3卒	佐藤ゼミ
原田 泰人	商・会計	94.3卒	川北ゼミ
臂 美左緒	経・産経	91.3卒	池田ゼミ
堀場 直人	法・法律	89.3卒	金井・吉田ゼミ
町田 和宏	文・英文	94.3卒	—
山根 夏枝	法・法律	93.3卒	金原ゼミ
陶江 徹	商・会計	4年在学	大津ゼミ
脇坂 容子	商・会計	84.3卒	浅野ゼミ
渡邊 准	法・政治	94.3卒	—



阪神・淡路大震災、サリン事件、急激な円高、金融不安など暗い出来事が多発した1995年も終わろうとしています。1995年は我が中央大学公認会計士会の求心力でもあった井上達雄先生（当会の名誉会長）を失った忘れがたい年となりました。

小生も、大学在学中の財務諸表論の講義ばかりでなく、川北博事務所に勤務していた会計士補時代、井上先生に直接監査業務のご指導をいただいた思い出があります。先生のご冥福をお祈りいたします。

中央大学公認会計士会会報「絆」の第3号は、井上達雄先生の追悼号といたしました。先生に関係の深かった会員にお願いし、先生の思い出等を

執筆していただきましたが、他に執筆をお願いすべき会員が数多くあると思われませんが、今後会報に寄稿していただきたいと思っています。

年末にかけ、大和銀行、兵庫銀行、住専等の公認会計士監査について国会やマスコミ等で問題ありと取り上げられていますが、一方、信用金庫、信用組合等の協同組織金融機関や銀行の資産評価について公認会計士監査の導入が予定される等公認会計士監査への期待も着実に拡まっています。

来る1996年は、公認会計士にとって正念場となるものと考えられ、我が中央大学公認会計士会の会員へ一層の活躍が期待されています。

### 中央大学公認会計士会報 No.3

平成7年12月20日発行

発行人 中央大学公認会計士会 会長

山本秀夫

発行所 〒101 千代田区神田駿河台3-11-5  
中央大学駿河台記念館内  
中央大学経理研究所気付